報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　エルネスト・ラクラウの政治思想 ―敵対性・不審者デモクラシー―

氏　　名　山本圭

論　文　内　容　の　要　旨

本論文の目的は二つに大別される。第一の目的は、ラクラウの政治理論、特に彼が唱える「ポスト・マルクス主義」の全体像を提示することである。そのさい本研究では、ラクラウのポスト・マルクス主義を二つの軸から焦点化したい。それらは「ポスト基礎付け主義 post-foundationalism」と「ラディカルな唯物論 radical materialism」である。ここで重要なことは、これら二つの中心的モメントが互いに相反するベクトルを指示していることである。すなわち、「ポスト基礎付け主義」が、ヘゲモニー実践を通じて（不完全ながらも）社会空間を閉じようとする構えに対応しているとすれば、一方「ラディカルな唯物論」は、そのような閉合が最終的に失敗するという認識に対応している。ラクラウのポスト・マルクス主義は、これらの「開」と「閉」という二つのベクトルが引き合う緊張の場に位置取るのであり、そのため社会空間を完全に閉じようとすることはおろか、それをただただ他者に向けて開け、戯れればよいとする、いわゆる「ポストモダン」の諸理論とは区別されねばならないことが明らかになるだろう。

本論文の第二の目的は、ラクラウのポスト・マルクス主義についての議論から、そのデモクラシー論を引き出すことである。本論で詳述するように、ラクラウのデモクラシー論はそのポピュリズム論においてひとつの到達点を示している。しかし本論文が試みたいことは、これを「不審者のデモクラシー prowler's democracy」として提示し直すことにある。不審者とは「ある社会を構成している支配的な言説に適切に位置づけられていない、そのため意味を十分に固定していない/不十分に意味付けされているアイデンティティ」ということができる。本論文の中心的な議論のひとつは、現代民主主義理論が今日増殖しつつあるこのような政治的アイデンティティを捉え損なっているということ、ラクラウの政治理論がそれを踏まえた仕方でデモクラシーを語る可能性を有しているということにほかなら

ない。言うまでもなくこの試みは、ラクラウの問題意識から「直接」導かれるものではないが、しかしそれにもかかわらず、それは間違いなくラクラウの理論的可能性から引き出されるものなのであり、「ラディカル・デモクラシー」が今日的な問題状況において喫緊の重要性を持つことを示すのは、このような方法において他にないと信じる。

本論文の構成は次の通りである。先に述べた二つの目的に対応する仕方で、本論文は二部構成をとっている。第一部「エルネスト・ラウラウのポスト・マルクス主義」においては、本論文の第一の目的であるラクラウの政治理論の全面的な検討を試みる。 第一章「ポスト・マルクス主義の方法論」では、シャンタル・ムフとの共著である『ヘゲモニーと社会主義戦略』を中心に、ラクラウが打ち出したポスト・マルクス主義の方法論を検討する。ラクラウがマルクス主義の本質主義、ないし還元主義と呼ぶものを克服するべく導入されるのが、「言説」の概念であり、本章ではこれを詳細に検討する。その後、ラクラウ＝ムフのポスト・マルクス主義に向けられた代表的な批判を検討し、それらに対する彼らの応答から、ラクラウのポスト・マルクス主義の中心的な柱として「ポスト基礎付け主義」と「ラディカルな唯物論」があることを明らかにする。

第二章「政治と普遍的なるものの行方」では、ラクラウのポスト・マルクス主義を支える特徴のうち「ポスト基礎付け主義」、つまりは社会空間を閉じようとするベクトルに対応するものとして、「普遍性」の問題を取り上げる。多元主義の旗印をもとに、個別主義的なアイデンティティが跋扈するなか、普遍主義という観念はややもすれば全体主義的なイデオロギーに堕するものとして忌避される傾向にある。しかしラクラウは、政治を復権させるためには普遍性を再構築することこそが不可欠であるという明確な立場を打ち出す。本章は、今日いかなる普遍性の概念が、そして普遍主義と個別主義のどのような関係が可能であるかについての検討をおこなう。

第三章「敵対性から異質なものへ」は、今度は社会空間を開くベクトルである「ラディカルな唯物論」に対応している。本章がまず分析の俎上に載せるのは、ラクラウの政治理論において枢要な位置を占める「敵対性」の概念である。敵対性はラクラウの政治理論において一貫して重要な比重が与えられているものであるが、それをよくよく分析するとその提示の仕方が一様ではないことが明らかになる。本章ではこの敵対性概念の変遷を追跡し、さらにはそれが「異質性」という概念に交差する過程を検討する。「異質性」は敵対関係より外部の、ラクラウが「ラディカルな外部」と呼ぶものであり、これこそ社会空間の最終的な縫合を不可能にするものとして提示されるのを見るだろう。こうして第一部では、ラクラウのポスト・マルクス主義が明らかにされるだろう。

第二部「不審者のデモクラシー」では、ラクラウのポスト・マルクス主義から導かれるラディカル・デモクラシー論を検討の対象にする。第四章「現代民主主義におけるアゴニズムの隘路」ではそのための予備作業として、現代民主主義理論、なかでもラクラウのデ

モクラシー論としばしば混同されている闘技的民主主義を取り上げる。闘技的民主主義の代表的理論を分析することでその理論的潮流内部での共通点と差異が浮かび上がるが、それと同時にこれらが抱える限界もまた明らかになる。本章では、闘技的民主主義が熟議民主主義へのオルタナティブを提示したものではなく、むしろその一側面を強調したひとつのヴァージョンであることを示すだろう。

第五章「不審者のモンタージュ」では、本論文が「不審者」と呼ぶ新しい政治的アイデンティティを明らかにする。まず本章では、マルクスの古典的著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』を手掛かりに、いかに社会からの爪弾きものが同質的な空間に介入する政治勢力になりうるのかを検討する。しかし、しばしば「後期近代」とも呼ばれる時代にあっては、異質性は単に外部のそれではない。本章では続いて、「アンダークラス論」や「社会的排除論」の分析を経由しながら、包摂/排除の語りが前提とするような外部/内部のメタファーが十分に機能していない現代のアイデンティティ状況を提示したい。そしてそれが明らかにするのは、異質性は外部に放擲されたそれではありえず、むしろアイデンティティの不安定性や欠如として内部そのものにあるということである。この不安で不安定なアイデンティティを生きることを強いられている「われわれ」こそ、本論文が「不審者」と呼ぶものであり、ラディカル・デモクラシーはまさに、そのようなアイデンティティこそを政治的主体として捉える必要があることを提示するだろう。

このような状況を踏まえ、第六章「不審者のデモクラシー——新しい動員にむけて」では、ラクラウのデモクラシー論を、より広範な人々の動員を可能にする理論として錬磨する。それは内部そのものにある欠如から、新しい節合関係、代表関係、そして敵対関係を紡ぎだすものであり、それはわれわれが「不審者のデモクラシー」と名付ける新しい連帯の可能性を示すだろう。